

# 帆檣成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース  
vol.41

## 「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。  
人が多く出入りする活気ある「みなと」を  
イメージしました。

## CONTENTS

特集1	みなとびあの新潟開港150周年が面白い!	P.2~3
特集2	第14回むかしのくらし展「旅はぼうけん」	P.4
歴史さんぽ	葛塚あるき 新潟市北区葛塚	P.5
おすすめの一冊	絵解き謎解き 江戸のそば猪口	P.5
みなとびあ研究notes	新潟川開き 一花火大会の系譜—	P.6
館長日記	小さな事実の大きな意義	P.7
収蔵資料紹介	卒業後の進路照会文書	P.7
博物館あちらこちら	日本遺産案内看板	P.8



新潟市歴史博物館  
博物館ニュース

帆檣成林

Vol.41

## たいけんのひろばプログラム

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・参加費・対象
9/16 <sup>±</sup> 10:00~12:00	みなとびあワラ部	ワラソウリづくりの自主練習をします。初心者の方もどうぞ。	ワラ部員が対象です。
9/17 <sup>日</sup> 14:00~15:00	ワラのコースターづくり	依頼の原理をつかって、ワラのコースターを作ります。	申込み不要・どなたでも・ 材料がなくなり次第終了・無料
9/23 <sup>±</sup> ・24 <sup>日</sup> 14:00~15:30	ピンホールカメラ	自作のピンホールカメラを作って、撮影・現像します。 (全2日) 1日目はカメラの製作、2日目に撮影・現像を行います。	要申込み9/17 <sup>日</sup> まで・ 小学生以上8人(各日)・500円
9/30 <sup>±</sup> ・10/1 <sup>日</sup> 14:00~15:30	企画展関連 小田原ちようちんづくり	折りたたんでコンパクトにしようことができる携帯ちようちん。 発祥の地「小田原」の工作キットです。	要申込み9/21 <sup>日</sup> まで・ 10人(各日)・1,000円
10/7 <sup>±</sup> 14:00~15:30	どんぐりクッキーづくり	敷地にあるマテバシイの実を使って、どんぐりクッキーを作ります。 縄文人のように石の道具を使ってみましょう。	要申込み9/30 <sup>日</sup> まで・ 小学生以上15人・100円
10/8 <sup>日</sup> 14:00~15:30	こども歴史クラブ 「下町たんけん」	旧小澤家住宅や日利山、湊稲荷神社などをめぐって、 みなとまちとして栄えた新潟の様子を知りましょう。	こども歴史クラブの 部員が対象です。
10/21 <sup>±</sup> 10:00~12:00	みなとびあワラ部	ワラソウリづくりの自主練習をします。初心者の方もどうぞ。	ワラ部員が対象です。
10/21 <sup>±</sup> 14:00~15:30	みなとびあもめん部	博物館資料を使いながら、布生産にまつわる手仕事を体験する試みです。	もめん部部員が対象です。
10/29 <sup>日</sup> 11:00~12:00	企画展関連 もちつき	むかしながらのもちつきをしたあとは、みんなでもちを食べましょう。	申込み不要・ 材料がなくなり次第終了・無料

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。申込み締切日は、当館までお問い合わせください。

### 企画展 第14回むかしのくらし展 旅はぼうけん

「旅」をテーマに、いまとむかしの違いをわかりやすく紹介します。むかしのガイドマップや巨大すごろくを楽しみながら、博物館でむかしの旅に出かけましょう。

【会期】2017年9月16日(土)~11月26日(日)  
【休館日】毎週月曜日(9月18日・10月9日は開館)  
【観覧料】無料 \*常設展示の観覧は有料です  
【主催】新潟市歴史博物館

#### 関連事業

##### ■小田原ちようちんづくり 一むかしの携帯ライト

日時：9月30日(土)・10月1日(日)  
午後2時~3時30分  
会場：本館1階たいけんのひろば  
定員：各日10名 参加費：1,000円  
申込み：9月21日(木)までにお名前・電話番号を、  
メールもしくはFAXで博物館まで。

##### ■もちつき 一旅の楽しみ茶屋のもち

日時：10月29日(日) 午前11時~12時  
会場：本館1階エントランスホール  
参加費：無料 申込み：不要



### 次回 企画展 「江戸時代の新潟町」展

発掘調査によって見つかった陶磁器や屋敷跡などの考古資料と、絵図や書籍などの歴史資料をあわせて展示し、江戸時代の湊町新潟の繁栄を紹介します。

【会期】2017年12月9日(土)~2018年1月28日(日)  
【休館日】毎週月曜日(1月8日は開館)、1月9日(火)、年末年始(12月28日~1月3日)  
【観覧料】無料 \*常設展示の観覧は有料です

【主催】新潟市歴史博物館(みなとの博物館ネットワーク・フォーラム助成事業)

【プロジェクト協賛】NST 日利山五合目 北陸ガス株式会社 NSG新潟総合学院  
信濃川ウォーターシャトル(株) 株本間組 株田中屋本店  
株堀川 (南新潟たけうち)

【協力】新潟市文化財センター

#### 博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、  
毎月第4日曜日にお話します。

【時間】13:30~15:00 【会場】本館2階セミナー室

【申込】不要(当日受付・定員80人程度) 【資料代】100円

■9月の講座：9月24日(日)「江戸期の難船」講師：若崎敦朗

■10月の講座：10月22日(日)「新潟商工祭」講師：渡邊久美子

### 博物館あちらこちら 日本遺産案内看板

この春、当館敷地に大きな案内看板が設置されました。車でご来館された方は、  
なかなか目にされる機会がないかもしれません。信濃川に向けて建てられています  
ので、みなと・さかみを散策すると見ることが出来ます。

この看板は、平成28年度に認定された日本遺産「なんだ、コレは！」信濃川流域  
の火焰型土器と雪国の文化の構成文化財を収蔵・展示している施設であることを示しています。当館には、  
このうちの場遺跡・同出土品に関する展示があります。同遺跡や出土品は信濃川流域で古代から鮭漁  
が盛んであったことを伝えています。縄文人にとっても重要な食糧資源のひとつであった鮭をめぐる本展  
示を、常設展示室でぜひご覧になってください。



### 編集 後記

41号は、開港150周年記念に向けた取り組みをご紹介しました。  
出版物や新作アニメーション、特別展など、2018年度のお披露目  
をお待ちいただく一方、市民のみならずご参加いただける歴史  
発見プロジェクトや墓石調査を実施中です。もちろん記念事業以  
外も、表紙の「タイムスリップ・クイズラリー」(時代衣装でのガイ  
ドイベント)など活気があります。ぜひ今後のイベント情報もチェ  
ックしてください。(中村)

#### ■お問い合わせ・申込みは博物館まで

新潟市歴史博物館 みなとびあ  
〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
Tel.025-225-6111 Fax.025-225-6130  
E-mail museum@nchm.jp URL http://www.nchm.jp  
【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日・年末年始(12/28~1/3)  
【開館時間】(4-9月)9:30~18:00(10-3月)9:30~17:00



2017. 5. 28 現在

「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。

NST 日利山五合目 北陸ガス NSGグループ Water Shuttle

本間組 田中屋本店 堀川 新潟たけうち

■ 帆檣成林「はんしょうせいりん」第41号  
■ 編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
■ 印刷／株式会社博進堂  
■ 発行日 平成29年9月13日



# みなとぴあの 新潟開港一五〇周年がおもしろい！

小林 隆幸

二〇一九年一月一日、新潟市は開港一五〇周年を迎えます。安政五（一八五八）年に幕府が諸外国と結んだ修好通商条約で開港五港の一つに選ばれた新潟は、一八六九年一月一日（旧暦：明治元年十一月十九日）に開港しました。「一五〇周年」とは単なる時間の経過でしかありませんが、みなとぴあでは、「一五〇周年」に大きな期待を寄せています。

なぜか。それは、開港一五〇周年は、新潟市民が地域や地域の歴史に目を向け、あらためて地域の特色やそこに暮らしている自分たちのアイデンティティを考えるよい機会になるからです。それができれば、地域への愛着やそこに住む喜びが増し、おのずと地域の良さや誇りを新潟を訪れる方々にもアピールすることができるとでしょう。そのためにもみなとぴあでは開港一五〇周年を機に、市民が地域の歴史を振り返り、地域についての関心を高めるきっかけになるような各種の取り組みを実施しています。ここに主なものを取り上げてみます。

## みなとぴあ歴史発見プロジェクト

この事業は子どもから大人まで幅広く、みなとまち新潟の歴史に親しみ、

自ら歴史を発見する喜びを知ってもらい、開港一五〇周年を迎える新潟の街を盛り上げていくことを目的に始めたものです。今年で三年目となります。

このプロジェクトでは新潟の港または港町に関連した企画展を開催するほか、歴史好きの市民を対象とした「史楽講座」、予習・復習必須のゼミ形式で実施する「中級古文書演習」、小学生を対象に古代から現代までの人々の暮らしや技・知恵を伝える「こども歴史クラブ」などを実施しています。

「史楽講座」はその年におもしろそうな歴史の話題を見つけてテーマとし、それにあつた講師を外部からお招きして、一般向けにわかりやすくお話ししていただく全四回の講座です。歴史ドラマなどを好んで視聴しているような市民が主な対象です。また、「こども歴史クラブ」は事前に登録したクラブ員が対象で、月一回のペースで活動しています。ほぼ一年をかけた、当館を会場としたクラブ活動で、子どもたちにとっては学校の枠を越えた交流の場にもなっています。

この歴史発見プロジェクトは当館が独自に始めた事業で、あらかじめ実施することを市から決められている他の事業とは異なります。そのためこの事業にかかる予算はなく、その財源は団体や個人からの協賛金等で賄っています。つま

## 図説新潟開港一五〇年記念誌の刊行

一般向けに分かりやすく開港一五〇周年の歴史を解くテキストの準備にも取りかかっています。画像を中心に構成する図説とし、見て楽しめる本として二〇一八年の秋頃の刊行を予定しています。市民にとっては港町新潟の歴史を学ぶ教科書の一つになるでしょう。

## 開港一五〇年をテーマとしたアニメーション制作

これも一般向けに分かりやすく開港の歴史を伝えるためのもので、特に子どもを主な対象としています。書籍よりも娛樂性が高く理解しやすくなるよう、アニメーションで歴史を伝えます。「マンガ・アニメのまち にいがた」のサポートキャラクターである花野古町と笹田五郎が登場し、別々にタイムトラベルして、それぞれ開港前の幕末の新潟と、開港し近代化し始めた新潟の二つの街を訪ねます。二人の見て聞いてきた体験を比較しながら、開港による街の移り変わりを紹介します。

二〇一八年度にミュージアムシアターでの上映を予定しています。

## 西安博物院と連携した特別展

みなとぴあは中国の西安博物院と友好提携しています。博物院が所在する



西安博物院

日本国内で中国に関する展覧会が開催されることは珍しくありません。大手マスコミ会社などが企画・主催する大規模な展覧会が、日本各地を巡回する例はしばしば見られます。しかし、

西安市はかつての長安で、中国を代表する歴代の王都が置かれた都市です。新潟開港一五〇周年の記念事業として、この西安市と西安博物院の協力を得て、西安博物院が所蔵する資料を新潟で公開する特別展を二〇一八年度に開催します。

新潟開港とは、新潟と外国との交流が始まったことを意味します。新潟市は日本海側の主要都市であり、現在では東アジアとの交流にも力を入れています。友好関係にある西安博物院との連携で特別展が開催できることは、東アジアの交流を大切にしてきた賜物ともいえます。その意味でも、この特別展は開港記念事業にふさわしいといえるでしょう。

りこの事業は市民の理解とその後押しによって成り立っているのです。



こども歴史クラブ「水墨画に挑戦！」

## 墓石に近世新潟町の歴史を探るプロジェクト

これは文化庁から受託した「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」で行っているものです。みなとぴあを中心に「みなと新潟実行委員会」を組織し、市民から調査隊を募って実施しています。

古町通をはじめとする現在の新潟の中心市街地は、江戸時代に整備された湊町新潟を引き継いでいます。しかし、度々の大火や都市化などにより江戸時代にさかのぼる建物などを街なかで目にするのはほとんどできません。そこで注目したのが寺院の墓石です。数は少なくなっていますが、墓石であれ



墓石調査の様子

また、この調査を市民が中心となって実施することにも意味があります。博物館と連携しながら市民自らが調査を進めていくことで、地域への愛着を深め、歴史探求の楽しさが実感できるからです。そしてその成果を博物館と市民が共有することが、このプロジェクトのねらいです。

月までの完了をめざして工事が進められています。

## 旧新潟税関庁舎の耐震補強工事

開港場新潟を象徴する施設が旧新潟税関庁舎です。現在は国の重要文化財に指定されています。旧税関は開港後に開港業務を行う役所として一八六九年十一月七日（旧暦：十月四日）に落成しました。完成当初は新潟運上所と呼ばれていました。当時は葦などが生い茂るヤチだった信濃川の川べりに盛り土をして、急ピッチで建物が建てられました。

そのこともあって、旧税関が建つ敷地は地盤が弱く大規模な地震の際には液化化する恐れがあります。また建物本体も古い木造建築であり、決して地震に強い構造ではありません。それを克服し、将来に向けて長く保存しかつ安全に活用していくため、文化庁からの指導を受けながら、現在耐震補強工事を実施しています。

その主な工事は、建物直下の基礎を強化し液状化に備える工事、建物本体に補強材を入れ建物の強度を増す工事、万が一火災が発生した場合の放水銃の設置、屋外監視カメラの設置などです。こうした工事も開港一五〇周年に合わせ、その当日となる二〇一九年一月一日に間に合うよう、前年の十二



旧新潟税関庁舎改修工事見学会（4月16日）

みなとぴあは、開港場を象徴する旧新潟税関と一体となって整備された博物館です。そして、みなとまちとして発展してきた新潟の歴史は、館の調査・研究の核であり、主要な展示テーマとなっています。新潟開港一五〇周年が新潟の歴史を見つめなおすきっかけになると同時に、みなとぴあにとっては今までの活動や今後の方向を考える一つの節目ともなります。

これを機に、みなとぴあの今後の可能性を模索しながら新潟開港一五〇周年に向けた事業を展開し、市民の皆さんとともに新潟の歴史を考え、歴史を媒介とした文化的で楽しい市民の活動や暮らしにも貢献していきたいと思っています。それもみなとぴあの使命だと考えています。

（こばやし たかゆき 学芸員）



当館では毎年秋に、小学三・四年生のむかしのくらしや地域の歴史の学習に合わせた企画展を開催しています。今年は「旅」をテーマに、いとむかしの違いをご紹介します。

目的地につくまでがおもしろい

古くから長い距離を移動する旅人はいましたが、現代の観光旅行に近い旅を多くの方が楽しむようになったのは江戸時代からです。

徳川家康は関ヶ原の合戦で勝利すると、翌年慶長六(一六〇一)年には江戸と京都を結ぶ東海道を定めました。以降、主要道である五街道(東海道・中山道・日光道中・奥州道中・甲州道中)を整備し、一里塚や宿場を設置しました。宿場は宿泊のほか継立を担っており、馬や人足が用意されていて、次の宿場まで人や荷物を送りました。

これらは本来幕府の公用役人のためのものです。そもそも庶民は自由に旅することができませんでした。ただし、寺社への参詣が目的であれば可能であり、宿泊や継立も有料にはなりませんが利用できました。このような交通環境の整備もあって、より多くの人が旅に出るようになったのです。

現在の新潟市域を通る古い街道としては、弥彦山の麓から赤塚を通り、新潟へ至る「北国街道」が知られています。

す。北国街道とは主に中山道の追分から直江津へ通じる道をいいますが、そこから新潟までの道も古くから存在しており、「北陸道」「浜街道」など様々に呼ばれていたようです。

ほかに、新潟から北上して村上へ向かう浜通りや、中山道の高崎から三國峠を経て寺泊に至る三國街道の途中、長岡から分かれて新津を通り、新発田、村上へ向かう街道がありました。

これらの街道を利用して、越後一、北国一の湊町ともいわれた新潟や、新津の火井(天然ガスの自噴)など越後七不思議と呼ばれる名所めぐり、越後一宮の弥彦神社に参詣する人も多かったようです。彼らは新潟を経て、信濃善光寺、伊勢神宮、また京都・大坂や江戸へ、あるいは北上して東北の出羽三山や松島へと向かいました。

江戸時代の人々は、めつたに出かけることができない旅なので、行きと帰りで経路を変えて、途中にある寺社や名所をできるだけ多くめぐらうとしました。

旅の変化をたいけん

旅が大きく変化するのは鉄道の発達によります。新潟では明治三十(一八九七)年に北越鉄道会社の沼垂(一ノ木戸(三条市)間が開業し、大正期には県内の鉄道網が形成されていきます。

到着までの時間が短縮し、目的地での時間・観光が充実しました。また、乗物に乗るといった新たな楽しみも生まれました。一方で、目的地までの間は旅の途中経過となりました。また、歩いての旅は軽装であることが必須でしたが、座ったまま目的地につく鉄道旅行では、大きなトランクなどの使用も可能となり、旅のスタイルも変わりました。

展示では、その変化を比較しながらご紹介いたします。最後はこの二つの旅のどちらかを選んで、巨大すごろくで体験してもらおう仕掛けになっています。

「今年より前の時代」

小学三年生はまだ歴史の学習が始まっておらず、その事前学習といえるむかしのくらしの学習は、祖父母が子供だった頃・父母が子供だった頃・父が子供だった頃、現在のこの時代区分で行われるようです。当館は、むかしのくらしの道具を展示し、直に触れることもできる「たいけんのひろば」を常時無料で開放しており、そこを中心に多くの小学生のみならず、大人にも多く利用されています。見学後には感想を送っていただくことがあり、そのお手紙は微笑ましいと同時に新鮮です。

「二〇一五年より前の時代があることがわかった」にいがたから東京はとおいということがわかりました。

大人が当たり前のように思っている時間や距離の感覚がないと、世界はどのように感じられるのでしょうか。自分も通ってきた時代のはずなのに、残念ながらすっかり思い出せなくなっています。児童生徒に接していると、ずいぶん多くのことを知っている子もいて一括りにはできませんが、時間に加え距離の隔たりを扱う今回のテーマは、十分な配慮が必要です。

展示では、小学三・四年生がすでに聞き知っているであろうものに寄り添いつつ、前提として内容に注意し、情報はできるだけシンプルに伝えたいと考えました。大人にとって当たり前前に感じている内容も、改めて考えみると多くの発見があるかもしれません。そもそも旅は慣れぬ世界へのぼうげん

であり、子供も大人も一緒になっでわくわくできるものだと思います。ぜひ、旅を楽しむ気持ちでお気軽にご来場ください。



駅立売弁当の御案内 1950年代後半

(なかむら さとな 学芸員)

「葛塚市」は昭和32年まで本町で行われていましたが、自動車の交通量が増えて場所を変えました。本町の西詰、下他門交差点の南には蒸気乗り場跡の看板があります。現在、川の流路が変わり面影はありませんが、明治11年葛塚-新潟間に航路が開通して以降、昭和初期までここから川蒸気が発着していました。

戻って北に向かうと、右側に「よりなせや葛塚市」の看板が見えます。現、葛塚市開催地のここは常盤町という名前、明治4年に新たに開かれた町場でした。水田を埋め立てて形成されたため、脇道から南の本町方面を見ると本町側が高い坂になっています。常盤町は通りの中央に水路が通り、屋号を記した街灯、料亭などが並び、風情ある花街を成していました。

常盤町を東に進むと龍雲寺の脇で豊栄駅前通りに合流します。駅に戻ると全体を通して約2.2kmの道のりです。また、余裕がありましたら稲荷神社から東に向かい北区郷土博物館で北辰隊の資料などを見るのもおすすめです。

田嶋 悠佑(たじま ゆうすけ 学芸員)



古い町並みの面影を残す大口町

歴史さんぽ

葛塚あるき

新潟市北区葛塚

豊栄駅前の旧豊栄市中心部は江戸時代に下興野新田と呼ばれていましたが、明治11(1878)年に葛塚村と改称されました。「新田」や「村」と呼ばれていましたが、葛塚には江戸時代から市も立ち実質的には町を形成していました。その町の跡をたどってみましょう。

駅前正面の商店街は昭和31(1956)年の白新線開通後に形成されたもので、元々の町は駅から約300m東、石動神社の南から始まり、稲荷神社の前で西に折れて多門橋まで、全長約1.5kmと、細長く続きます。なお、石動神社は小高い丘の上に立っていますが、この丘が「葛塚」と呼ばれており、明治以降の地区名の由来となったとされます。

石動神社から約100m東、葛塚交差点の南から町が始まります。この付近は「大口町」と呼ばれ、新発田方面の入り口となる町で、稲荷神社付近まで続いています。現在は「匠通り」と呼ばれ菓子、呉服、仏壇などを扱う店が並び、葛塚の中でも古い町並みの面影を色濃く残しています。

葛塚交差点から約650mで稲荷神社、開市神社に到着します。開市神社には、下興野新田庄屋の遠藤家の一族が祀られています。遠藤家は大口町の一角に屋敷を構え、市の開設や用水建設などに業績を残すなど葛塚の建設に功績を残しています。また、維新期の当主昭忠は「北辰隊」を組織して戊辰戦争を戦っています。

稲荷神社の鳥居から西に伸びるのが本町です。葛塚の中心街で銀行などの施設が集中します。現在も続く

おすすめの1冊

絵解き謎解き 江戸のそば猪口

皆さんは、食器としてのそば猪口を手にとったり、実際に使ったりしたことがあるかと思えます。そば猪口の外周を見ると、さまざまな図柄が描かれています。現代の具象的な絵柄なら、対象が何であるかすぐにわかるでしょうが、古いそば猪口の場合、一体何を描いたものなのか皆目見当もつかないといった経験があるのではないのでしょうか。

本書は、著者の「そば猪口愛」と旺盛な探究心から、その謎を読み解き明らかにするものです。著者が手がかりにしたのは、古典文学や江戸期の文学作品、歌舞伎の演目、さらには当時の流行や習俗でした。それらをヒントに謎の図柄が解き明かされる過程は、著者のユーモアセンスあふれる文章と相まって楽しいの一言に尽きます。江戸の町に暮らした人々の粋で洒落に富んだ感性や教養について、そば猪口の図柄から迫った斬新且つ目から鱗の一冊です。

(若崎 敦朗 学芸員)



岸間健貴著 ブックハウスHD 2012年10月



# 新潟川開き—花火大会の系譜—

渡邊久美子

六月から九月にかけて、新潟県内では、多くの花火大会が開催されます。市域でも数々の花火大会が催されますが、八月上旬に行われる新潟まつりの花火大会も市民に親しまれている一つです。当日は信濃川の河川敷に多くの観客が集まります。

ところで、この新潟まつりの花火大会の発祥が、明治時代にまでさかのぼるのをご存知でしょうか。また、大正時代から、二尺玉や三尺玉など大きな花火が打ち上げられていたこともほとんど知られていないと思います。

は広く、信濃川は現県政記念館の裏を流れ、境内地の公園の南側には堤があります。打ち上げ当夜、川中には芸妓連を乗せた豪農・豪商の屋形船や貸し船、近在の小舟が浮かび、公園内の料亭や堤は、見物人で大変混雑しました。初の試みである川開きは好評を博したようです。「驚天生」という人物が、新聞に記した川開きの感想を一部紹介します。

本稿では、花火大会の始まりと、盛大化する黎明期の様子を「新潟新聞」をもとに紹介します。

新潟まつりの花火大会の嚆矢は、明治十六(一八八三)年です。数人の有志者が発起人となり、白山公園にあった二つの料亭が会主となって催しました。それまで、神社のお祭りなどでの打ち上げはありましたが、花火の打ち上げをメインに置いた催し物は初めてでした。新聞に、江戸時代からの歴史を持つ「新潟川開」の名称で開催する旨を広告に出しています。

八月十一日、十二日と二日間にかけて行われ、花火は八寸玉以下で、計二百十発が「白山公園浦の浮洲」で打ち上げられました。この当時、今より川幅

(前略)八千八派ノ水脈ヲ集ヘ七十四橋ノ溝渠ヲ会スル好河流ヲ持チナガラ是迄舟遊ヒヲナス人ノ少ナカリシハ畢竟其機会ヲ得ザリシニ由ルナラン今後セメテハ一年ニ一度ナリトモ此機会ヲ得メランニハ彼貸座敷ノ奥ニ階カ若クハ割烹亭ノ裡坐敷ナラテハ面白遊ハ出来ヌト妄想スル人モ減スヘク追々ハ自然ニ良風習ヲ生スヘキ歟イツレニセヨ河開キノ一挙ハ至極ヨキ思付ナルヘシ

しかし、翌年以降は開催されませんでした。再び行われたのは、明治二十一年のことです。この際は、同十九年に架橋した萬代橋の萬代橋事務所と、川汽船会社安進社が開催し同二十六年の第五回まで継続しました。

その後、明治四十二(一九〇九)年、丁未会と新潟新聞社をはじめとする新聞各社が主催し、九月十一、十二日に

川開きを復興しました。丁未会は、同三十九年県が主催した樺太・ウラジオストク視察へ同行した市内の実業家らからなる親睦会です。

開催に当たり、主催者は「絶えたるを継ぎ廢れたるを興す川開き計画」と題した新聞広告を出しています。その文言に、「市民に公共的娛樂を興え市の繁栄を助長するもの」として川開きを位置づけ、この年大河津分水工事が再開し、市民にとって宿願だった近代港湾整備の端緒が開けたことを祝し、また「沈哀せる人気を回復」するため、「全市一致」して川開きを開催したい、と述べています。

実際、この年の川開きは、市を挙げてというべき内容で、協賛員に加わる名望家、花火や資金を寄附した商店・企業、市民、芸妓らの名前が統々と新聞に報じられています。また、花火師による「懸賞煙火競技会」など、以後の大会で開催される催事も登場しました。

花火は昼と夜の構成で、萬代橋を挟んだ上下流四方所の「突出し嶋」で打ち上げられました。花火の番付を見ると各々名前がついていて、風流なものから、「洋品店のチャンピオン」(源川洋品店)など、広告も兼ねたユニークな名前も見えます。

初日の昼花火は、午前九時主催者による一尺玉「万里に轟く船江の賑」から

始まりました。ちなみに、この一発目の花火の名前は、違う年もありますが、戦後まで引き継がれています。夜花火も大変盛況で、十一日は「不夜城の新潟陸は人を以て満たされ川は舟を以て蔽はる」とその様子を報じています。

この年の川開きは、主催者や市内商店が観客の誘致と消費を促す取り組みを行っている点も注目できます。二十年代でも、安進社が乗船賃の割引をしました。丁未会の安倍邦太郎が、汽船・汽車の割引交渉を行い、実際割引になりました。その効果もあり、汽船は臨時船を数十回往復しても間に合わなかったと伝えています。各交通機関の割引は以後、定着します。また、市内商店では、見物客を対象としたセールを行ったり、景品券入りの花火を打ち上げたりしました。この景品花火について、落下傘花火だったと、画家三芳悌吉が大正時代の下町を描いた『砂丘物語Ⅱ』(一九九六)で述懐しています。

四十二年の川開きは、多くの観客を集め大変な賑わいをもたらしました。翌年、丁未会と新聞各社は、新潟市長を会長に据えた新潟川開協賛会を結成し、名実ともに市の一大イベントとして花火大会を本格化させていくのです。

(わたなべ くみこ 学芸員)

## 小さな事実の大きな意義

歴史を学んでいると、初めは小さな事実から、積み重ねて大事を窺うことが少なくありません。

最近、『与板町史』を読んでいる。「小加礼井保」で下地進止権を氷室判官に認められた文書に出会いました(一五八頁)。

二〇年前、旧三島郡和島村下ノ西遺跡で「三村田人」等と墨書した木簡が出土しました(積文参照)。報告書はこの部分を「三つの村の田人」という解釈以外に人名とすることも可能と述べています。

され、それが日本国家や社会の特徴として論じられました。しかしこの木簡は「今浪人司」が「三村田人」を籠んで下さいと担当専司の丸部某さんに「牒」の文書でお願いしているのです。「三村」が人名ではなく、「山俣」「泳取」「御布西」という三つの村のことであれば、通説が覆る大事につながります。「山俣」と「御布西」は地名として確認できています。現在地名として確認できていない「泳(水)取」の名を受け継ぐのが、「与板町史」に登場する「氷室」姓の判官ではないか。その彼に現地の「村」の支配権を認めているのではないか。大事に至る小さな事実によつて出会った思いがしました。

なぜなら、八世紀初め日本では中国唐の律令をモデルに統治が始まりましたが、日本の律令では、中国ではあった「村」規定をわざわざ削っています。そこで日本では「村」を地方統治の対象にしなかったと



新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二

《木簡積文》  
表「今浪人司謹牒 丸部専司二〇」×  
裏「龍山俣泳取御布西三村田人」×  
(二六〇)×(二六〇)×四〇 一九型式  
×印は以下折損を意味

### 収蔵資料紹介

## 卒業後の進路照会文書



この文書は、明治四十二(一九〇七)年十二月、新潟県立新潟高等女学校校長から卒業生に控えた本科四年生の保護者に宛てて出されたものです。卒業後の進路について学校側が調査するための照会文書です。

新潟県立新潟高等女学校は、明治三十三(一九〇〇)年に開校し、最初の卒業生を輩出する明治三十六年に本科卒業生を対象とした修業年限一年の補習科を設置しました。当初の補習科の修了生には小学校教員の資格が与えられました。三十八年には補習科を、補習科修了後に家庭に入る生徒に向けた甲種組と、小学校教員を目指す生徒に向けた乙種組の二組に分け、それぞれの将来に見合った教育が行われました。

しかし、四十年から新潟県の女性教員養成は新潟県長岡女子師範学校で一括して行われることになったため、教員志望の生徒は女子師範学

校二部に進学することになりました。この文書では今後の新潟高等女学校の補習科では、家庭に入るものと、さらに専門学校などに進学する生徒に向けたものとし、それぞれの進路に合わせた授業を行うとしています。

三十六年の補習科設置以来、補習科への進学者数は多かったのですが、四十年以降、その数は激減しました。《表》。教員資格が得られなくなったことが大きな原因と考えられます。文書では、本科卒業後直ぐに家庭に入らず、補習科に進学し、もう一年学ぶことが本人の将来のためにも良いと勧め、東京などへ進学する場合も補習科を経て進学することを勧めています。補習科の置かれた状況を考えると、この文書は、単に本科卒業後の進路調査のためのものでなく、補習科への勧誘文書と見て取れます。

年度	本科卒業生数	補習科修了生数
明治35年	77	
明治36年	89	53
明治37年	90	65
明治38年	83	56
明治39年	67	71
明治40年	81	20
明治41年	104	17
明治42年		16

《表》補習科進学者数の変遷  
(「県立新潟高等女学校創立以来三十六年間入学及卒業生状況一覽」より作成)

(藍野 かおり 学芸員)